



苦小牧工高
関東六華会

会報

2010.9
第7号

発行責任者 毅 夫治雄
川上 駿時鉄
編集 木田堂
藤石

「汽車通学」



側瀨 稔(機械二十七年卒)

一次大戦末期は道南の工業地域が連日の艦砲射撃を受けたため、昭和二〇年室蘭から岩見沢線の三川に疎開し、ここから吉工との縁が出来た。

二十四年に憧れの吉工に入学し、約一時間をかけての『汽車通学』が始まったが、予想だにできなかった出来事の連続だった。

火災で校舎の消失で『室内体育館の幾重にも仕切った教室』と、新制度教育が始まり旧制中学から高校への切替のため『併置中学との故で一年生の二年間体験』と悲惨な味わいになった。

これは新兵を二年間続けたことであり、当然上級生達の格好の餌食となり、それに加えて『急拵え校舎からのストレス』が上級生達の下級生達への気合入れが加速爆発していった。また長時間の汽車通学でも列車内での判らぬ説教とピシタで口内が切れて味噌汁も飲めなかった。

二年生になって待っていた

新校舎が出来た。

『木の香る教室に入ると・・・なんと精神が癒されたことか』本当に落ちついて勉強

が出来る環境だった。

これで三年生生活もこの延長で出来ると思いきや『機械科製図室への追いやられ』となり、苦工時代は『予想外の連続』でもあった。

この時代は敗戦の大混乱の最中で当然食料難は続いており、その中の出来事を一席。

昼食に米飯を半分恵んでやったお礼だと『土方弁当箱一杯の味噌煮・肉を貰い』夢中で食べて礼を言うと『犬の肉だから呉れてやった』とめかしおった。

燃料も不足し、冬に備え体育の時間に『北大演習林に薪拾い』が晩秋の風物詩だった。教科書も無く『黒板隅から隅までの幾度ものチョーク手書き』が教科書代わりで、これを我々が西洋紙に書き留めた。このように熱心に教壇に立たれたのが小野寺、北村先生だった。

貧しかったがスポーツが活発で、特にスケートは他校を寄せ付けず『内藤普先輩のレコードが刺激となり後輩の励み』になったと思う。

当時の就職先は・・・炭鉱、開発局、土木業界で蛭雪時代の仲間は散り々に夫々歩んだ。

そして！

四〇余年経過・・・クラス会の話が持ち上がり、初回は苦小牧で次は虎杖浜温泉と続いていた。いつしか東京組と交代当番でやること、日光、箱根、安房と各地を廻つてのクラス会となつていった。

またある時期から、東京組は春秋の二回旅行が広がった。

しかし七五歳以上になると年一回。今は一年に一回となつたが『毎年成人の日の集いは二〇年間』続いている。

卒業当時は三十八名なるも、九名の学友を失い二名が音信不通。現在『毎年』の集いには十七〜十八名の参加で最高齢は樺太・豊原工業からの引き上げの友で八十歳を迎えた。

この結末のある機械二七回生のクラス会を『歯車会』とし・・・我々級友は歯車の如く一枚一枚正確に歯が噛み合い、世の荒波にめげず突き進もう・・・として名付けた。

おわりに、同窓会の方々のご健康とご多幸と併せて母校の発展を祈願して筆を置きます。

《編集者メモ》同窓会には活発に親睦を重ねている会があり、その中でもこの歯車会はクラス会として特出していて興味深かった。

同期会では三十一期会が活発で、そのもとになったのはある一人の反省の弁が皆を感動結集させた由。これ等の集いにはドレマを感じさせぬ。



私のクラスから全国的な有名人が二人出た。作家の「小松山博」と大相撲の関取「栗毛山(橋井恵三)」である。

わが校は、各界に幾多の有名人を輩出して誇らしく思うが、机を並べたこの二人は、格段の差で私の自慢の種である。

私が勤めていた会社で、三十〜四十代の頃の部署には、学校の先輩・後輩が多く、一大勢力を誇っていた。

ある日、後輩が小松山君の本を持ってきて、皆んなに、「この本の作者は苦工の先輩とか、文章が非常に上手いとか、内容に共感する事が多いとか、作家としての完成が鋭いとかバタほめの名解説を得々と披露していた。

「自慢の同級生」

坂本敏弘(電気科二十一年卒)

私はあまりの惚れ込み様に、口を挟む余地が無かったが、「小松山君は俺と同じクラスだ」と小さな声で言い、顔を見た。「エエッ・・・」と驚く後輩に、私は物凄く満足した。

作家「小松山博」は、三十代後半に北海道で賞を受けてから、中央でも注目されるようになり、有名な文学賞にノミネートされる様になった。当然札幌から東京に来ることも多くなる。彼の来京に合わせて同期の者が激励会を行い盛会だったことなど後輩に話した。ただ、今度会ったとき、サインを買ってくれと頼まれ、軽く引き受けたがその後すっかり

忘れて約束を果たしていない。

「栗毛山」の橋井恵三君とは、五十代の頃、我が家のテレビで偶然再会した。化粧回しをした恵三がテレビの中で立っていた。

彼はその当時、苫小牧近郊で郵便局の局長をしていたが、珍しい経歴を持った局長さんとして紹介されていた。

彼は学校卒業後と同時に入門し、前頭五枚目まで上がったが、ヒゲの故障で残念ながら力士目前で大相撲人生は終わった。



会社の独身寮で仲間と共に応援団を結成し、テレビに向かい大声で応援した事を五十年以上過ぎた今、昨日の様に懐かしく思いつく。

私はこの近年、近くに住む同じクラスの小野君と二人で新年会を続けている。

彼はお酒の飲めない私に気を遣って、夜の部を避け昼食会にしてくれている。食後は清瀬に移動して、カラオケで盛り上がる。

小野君は橋井恵三と同じ、日高線富川の出身で、私は隣の鶴川という関係で妙な親近感があり仲よくしている。我々二人にとって、恵三は永遠のヒーローである。

関東に住む三十一年卒同期の連中も、七十を二三年過ぎ、すっかり落着いて皆んなで集まる機会が全く無くなっている。少しずつ欠けて来ている現在、総崩れしない内に、近々全員集合と行きたいものである。

関東六華会・事務局たより

「一」同窓会本部関係

①H二十一年度本部総会
グランドホテルニュー王子で五月二十九日開かれ、女性役員(建七〇回生)が始めて選出。女性卒業生の増加に伴う人事。当会からは欠席。

②三年後の創立九〇周年とその準備
この総会で役員増加で創立記念準備を進める議案が承認。計画は会員名簿発行24/1(改訂版)と募金の実施(246~25/10)。

③母校の北海道代表に：母校のニユースが少なくながで！
★機械工作部の活動がNHK・BSIIで「ニッポン熱中クラブ」で日頃の活動と北海道大会で苦工優勝を二月五日放送

★女子バスケットが東京体育館に北海道代表で、関東六華会から差し入れと応援に！・・・詳細記事を本号に掲載。

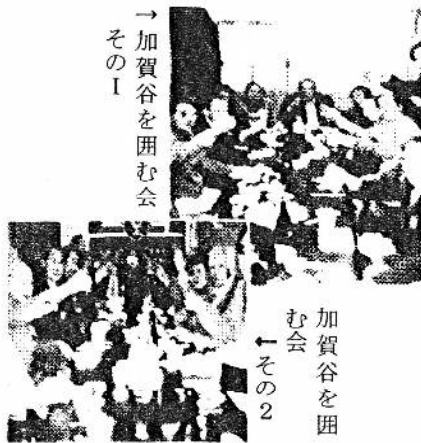
「二」関東六華会関係

①今年と同窓会は、西校と合同で十一月六日(土)十五時から十八時まで霞ヶ関ビル三十五階・東海大校友会館

会費八千円(抽選で銘菓付) 申し込みは：同封のハカギで ●青春時代の男女仲間の集い。是非参加を！お待ちしております。

②「加賀谷 建を囲む会」二月八日
石堂さん(元千葉支部幹事長)の呼びかけで遠方から有志二十五名が集会。会費制で千葉市内「鰐虎」で！
まず参議院の活動(総務委員/地デジ)と参加者全員の近況報告の後に、政治と民主党への期待感と不満意見百出。大いに盛り上がりました。

この内容は、来年の本部「六華」小冊に詳細記事掲載予定。



→加賀谷を囲む会
その1

加賀谷を囲む会
その2

③関東六華会役員交代
今期十一月の同窓会・総会でお諮りするのとに致します。

- 会長 木谷 駿夫(電三十五年卒)
- 副会長 石堂 鉄雄(土三十九年卒)
- 々 藤田 時治(電子四十五年卒)
- 幹事長 坂本 敏弘(電三十二年卒)
- 副幹事長 阿部 陽二(機三十八年卒)
- (退任) 川上毅(会長吉岡康行(副会長) 斉藤弘嘉(幹事長)

★詳細は別紙に記載 (川上)

「事務局移転」について

長い間、関東六華会の事務局を務めていた斉藤弘嘉君(通信三十六年卒)が、昨年の秋から体調をくずし、医師の診断の結果、「長期間の療養が必要」とのこと、事務局の仕事が出来なくなったと言われた。

以前、事務局の仕事を少し手伝ったことがあり、そんな関係から私が事務局の仕事の全てを引き継ぐことになりました。

斉藤君には及びませんが、会員の皆様のご支援、ご協力をいただいで、事務局をやっていると思っております。

よろしくお願ひ申し上げます。(木谷)

トピックス

昨年、テレビで放送された新橋の居酒屋「有薫酒造」を紹介致します。

このお店は、全国の公立高校、私立高校(約八〇〇高)の卒業生が、想い出や悩みなどを思い思いに書いた大学ノートが備えてあります。

我が苦工も、700何番目かにあります。昨年の同窓会に

二次会でお店に行き、同窓会の幹事メンバーがそれぞれの思いを書いてきました。新橋で呑む機会がありましたら、寄ってみてはいかがですか。

お店は「有薫酒造」→東京都港区新橋一丁一六四 りそな銀行地下一階です。(木谷)